

翻刻『怪談弁妄録』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 幸恵, 三浦, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/902

翻刻『怪談弁妄録』

武蔵野大学文学部日本文学文化学科平成二十九年卒業生 坂本 幸恵

指導教員 三浦 一朗

はじめに

本稿では、武蔵野大学文学部日本文学文化学科の平成二十九年卒業生である坂本幸恵さんが卒業論文の資料編として作成した原稿に基づき、読本『怪談弁妄録』の翻刻を公開する。

『怪談弁妄録』は、桃溪山人こと丹羽桃溪作の読本で、寛政十二年（一八〇〇）に京都・西村屋吉兵衛他三書肆相版で刊行された。半紙本五卷五冊（ただし、底本とした国立国会図書館本（請求記号一八八―一九四）は合一冊）、全十九編からなり、各話末に作者評を付す。

丹羽桃溪は大坂の人で、宝暦十年（一七六〇）生、文政五年（一八二二）没。享年六三。名は元国、字は伯

照、通称大黒屋喜兵衛。号に桃溪、桃溪山人の他、靖中庵（『万歳小謡昇平楽』）など。画を薮関月に学び、寛政年間頃には板本の挿絵を専門的に多く手がけている。桃溪が挿絵を描いた代表的な作品として、『摂津名所図会』（寛政十年刊）、『河内名所図会』（享和元年（一八〇一）刊）、および『紙漉重宝記』（寛政十年刊）、『鼓銅図録』（享和元年刊）などがある。（『日本古典文学大辞典』「丹羽桃溪」（肥田昭三執筆）参照。）

『怪談弁妄録』については、怪談の虚妄なることを批判し、怪異を合理的に解釈しようとする弁惑物の一つとして名前が挙がることはあるが、具体的には、儒者が妖怪を退ける巻一の「書生為鬼見殺」や、片袖幽霊譚を利用した詐欺談である巻一の二「一奸猾欺豪商」

など所収話の一部を取り上げた論考が一、二ある程度で、これまで本編が総体的に検討の対象とされることは少なかった。⁽²⁾ 早い時期に水谷不倒が本編と山岡元隣『百物語評判』とを比較して、次のように否定的に評したことが影響しているのかも知れない。

怪異の弁妄をしながら、なほ且狐狸の人を訛^{マヤ}かすを信じ、又其説も頗る浅薄で、元隣の如く考証して言義を尽したのではない。又説話としても、清少納言の古塚、成田治右衛門の話、樵夫が山中に入りて妖女と契りし話等、話題は寧ろ既刊書に出ている題材が多い。(中略) 兎に角、弁妄の価値に乏しく、矢張り在り来りの怪談ものに過ぎないのみである。⁽³⁾

しかし、本編が佳作とまでは言えないことは確かだし、でも、「弁妄の価値に乏しく、矢張り在り来りの怪談ものに過ぎない」という水谷の評価は的を射ていないように思われる。『怪談弁妄録』という題名が弁惑物としての予断を読者に与えてしまうことは否定できないが、実際のところ、本編は怪異を虚妄として退け、そこに当時の知に基づく合理的な解釈をくわえること自体を目的と

はしていないからである。

坂本さんは卒業論文で、まず『怪談弁妄録』は「人が人に欺かれる話」と「人が狐狸などの怪異に欺かれる話」に大きく二分できることを指摘した。前者はいわゆる弁惑物の作品と重なる行き方で、怪異を、誰かがそう見せかけて人を欺いたものとして合理的に解釈するものである。先に挙げたうち、巻一の二「一奸猾欺豪商」がその例である。一方後者は、怪異の有無を問うのではなく、むしろ怪異に欺かれる側の人間のあり方に注目して批判の対象とする。先に挙げたうち、巻一の一「書生為鬼見殺」がその例である。また、巻三の一「小女視鬼物得一疾」・^{たいほうあくせんでんぐとちからをくらふ}巻三の四「大木悪善与天狗角力」のように、室鳩巢などの儒者の言や、医書『黄帝八十一難経』などの拠るべき書に根拠が見いだされる場合には、むしろ怪異の存在を認めさえする。

坂本さんはまた、相手が人が怪異かを問わず、むしろ欺かれる側の人間にある慢心を戒めると共に、「本心」すなわち物事の真相を正しく見極めることのできる明らかな心を持つこと、またそうした心のあり方に近づくた

めに学問と知識が必要であることを説くというのが『怪談弁妄録』に一貫して認められる姿勢であることも指摘する。本編が怪異を虚妄として退け、合理的に解釈すること自体を目的としていないと先に述べたのは、この意味においてである。以上のことを明らかにした坂本さんの卒業論文は、『怪談弁妄録』がいわゆる弁惑物という枠組みでは必ずしも捉えきれない作品であることを論じて、本編を水谷説とは異なる観点から総体的に捉え直した点で、学術的に意義を持つと思われる⁽³⁾。

堤邦彦氏が述べるように、「近世の人々の怪異観を知るために、弁惑物をもっと注目されてよい作品群」である⁽³⁾。本稿は、右の坂本さんの所説の前提となる資料を公開して批正を仰ぐと共に、今後の弁惑物の研究に資するべく、これまでも作品名が挙がることはありながら未翻刻であった『怪談弁妄録』全文を翻刻するものである。翻刻許可を頂いた国立国会図書館に感謝を申し上げます。また、翻刻の功は坂本幸恵さんにあることを明記する。(三浦一朗)

注

(1)

水谷不倒『選択古書解題』（「水谷不倒著作集第七卷」（中央公論社、一九七四年）所収「怪談弁妄録」の項、および堤邦彦『江戸の怪異譚 地下水脈の系譜』（ぺりかん社、二〇〇四年）第三部第三章Ⅲ「弁惑物読本の登場人物が人を化かす話」など参照。

(2)

『怪談弁妄録』について論じた主な先行研究として、注1前掲『選択古書解題』の他、太刀川清「怪談の弁惑物」（『学海』一六、二〇〇〇年九月）、近藤瑞木「儒者の妖怪退治―近世怪異譚と儒家思想―」（『日本文学』五四、二〇〇六年四月）など参照。

(3)

注1前掲『選択古書解題』、八一ページ。引用に際して、一部漢字を通行の字体に改めた。

(4)

なお、坂本幸恵さんの卒業論文の一部を抜粋した論考「『怪談弁妄録』における作者批評」が『武蔵野日本文学』二七（二〇一八年三月）に掲載される予定である。併せて参照されたい。

(5)

堤邦彦・杉本好伸編『江戸怪異綺想文芸大系5 近世民間異聞怪談集成』（国書刊行会、二〇〇三年）解題、一〇六三ページ。

【付記】

『怪談弁妄録』に目次はないが、底本とした国立国会図書館本では序の後、2丁裏に卷一のみの目次が書き入れられている。卷二以降の目次の書き入れはない。本翻刻では、2丁裏の書き入れを省略し、本編全体の目次を別に作成して次に掲げる。目次での章題は原文通りに表記する。振り仮名も原文に従うが、適宜濁点を補った。

『怪談弁妄録』目次

- 卷一の一「書生為鬼見殺」
しよせいぎのためにつかる
 卷一の二「一奸猾欺豪商」
いつのまいすおあきんどをあざむく
 卷一の三「清女の靈諷田夫」
せいじよ れいでんぶをふうす
 卷一の四「成田治左衛門与亡妻同枕衾」
あやしきおなきとどうふとなる
 卷二の一「妖女与樵夫為配匹」
てんぐのき だいいやをきる
 卷二の二「天狗喜兵衛截大蛇」
かくみをうつしてでかんす
 卷二の三「客弄笛感野狐」
むすめばけものをみてまいをえたり
 卷三の一「小女視鬼物得一疾」
うしろめをまはしめみだす
 卷三の二「訛言惑乱庸人」
きつねきやうかくをあざむく
 卷三の三「野狐誣俠客」

- 卷三の四「大木悪善与天狗角力」
たいぼくあくぜんくんとてんぐからどろぶ
 卷四の一「一商客暴死而見閻王」
いつせうかくはうしてまんわうをみる
 卷四の二「天狗誘老婆」
てんぐらうばをいざのふ
 卷四の三「美丈夫為二婦見恋」
びじやうぶにふにこいせらる
 卷五の一「姦夫義激而殺淫婦」
かんぶぎぎくしていんぶをころす
 卷五の二「巫術拙而為小厮現其妄」
ふじゆつたなふしてでつのためになそのぼうをあらはす
 卷五の三「二奸射利而為良吏見放逐」
かんりやをいて りやうりのためにおいはなたる
 卷五の四「痴僧為財死而不獲度脱」
ちそうざいにししてうかむことをえず
 卷五の五「好色而為古狸見災」
いづをこのみてふるたぬきにわざはひせらる
 以上

【凡例】

・原文に句読点はなく、濁点は有るものと無いものがある。読みやすさを考慮して、適宜句読点や濁点を補い、平仮名に漢字を当てる。なお、漢字は原則として現行の字体を用いる。

・平仮名に漢字を当てた場合、原文で平仮名であった部分を振り仮名で示し、原文を復元できるようにする。

これと区別するために、原文にある振り仮名は丸括弧（ ）に入れて示す。これら以外に新たに振り仮名を加えることはしない。

・漢字の左訓は、通常の振り仮名と区別するため、漢字の後に（左訓「 」と示す。

・接続助詞の「とも」「ども」に「共」を当てている場合、仮名を当て「とも」「ども」と表記する。この場合、原文での表記を振り仮名で示す。

・原文に改行は少ないが、読みやすさを考慮して適宜改行し、段落を設ける。

・合字は仮名に開く。

・明らかな誤字や当て字と判断される場合は適切な字に直すのを原則とするが、文意をつかめない場合や複数の可能性が想定される場合など、一部原文のまま残すこともある。

・誤字や当て字を直した場合、原文の表記をルビで示し、原文を復元できるようにする。

・明らかに脱字と思われる箇所には、前後から推測して適切な文字を丸括弧（ ）に入れて補う。

・衍字においても原文のままとし、右ルビにて「ママ」と表記する。

・汚れや虫損で判読できない字には字数分の四角□を当てる。

・踊り字（「、」「ゞ」「々」「く」など）は該当する仮名や漢字を当てて翻刻する。ただし、漢字の繰り返しで現行の表記でも踊り字を用いるのが一般的な場合（人々、時々など）には「々」を用いる。

・会話文や心内語には鍵括弧「 」を付ける。

・仮名遣いや漢字の送り仮名については原文のままとし、歴史的仮名遣いに合わせて改めたり、統一したりすることはしない。

・本文中に故事などの引用がある場合、参考として引用後の丸括弧（ ）内に出典を注記する。

・原文の序文と各話の題名は、漢文で書かれているが、ここでは、書き下して表記する。

・原文には巻数などの表記はないが、読解の便宜を考慮して、各話の題名の前に巻数を入れた。

序

古人言ふこと有り。口、無益を語する者は、木屑を囓むが如し。善きかな。世人茗を煮て話し、燭を剪て語す。好んで怪を話し奇を追ふ。亦た安くんぞ無益為らざることを得んや。近ごろ、坊間、様□小説家、怪力乱神を伝ふる所の者□(一オ)多し。其の書、月に刊し歳に鏤す。蓋し、世の好む所に従ひて、利を射るなり。今此の篇を閲するに是れに異なり。將に彼の好む所に就きて、之れが説を作し、其れ古へ之れを弁断するも佚して怪奇を信ずるの徒を、一心を醒悟して、盃蛇の疾を解かんとす。前の小説家の虚妄を称する者(一ウ)の儔にあらず。是れを之れ善く戲謔すれども謔を為さずと謂ふ。予、何ぞ無益を語する者と言はんや。

寛政庚申季夏

桃溪山人撰(2オ)(2ウ省略)

怪談弁妄録卷之一

卷一の一「書生鬼の為に殺さる」

京、丸太町に古、妖怪住める屋舎と云て人住ま

ず、草生へ茂りし家有りしが、奥州の書生修学のため、京へ上りて屋舎を求めしに、かの咄しを聞て、書生北方の彊者なれば、好んで其家を借り請たく由を申入れれば、旅舎の主人、固く止めて曰、「これ年久しく人の住捨てし屋舎にして、鬼物まま怪しきをなす」(3オ)由を語り、止むれども、「古より豪傑の人に鬼の災ひを成せしことなし。見給へ。我住しとき、かの鬼必避け隠れん。」と大言を吐き、かの家へ移りしに、数日を経れども、なんの怪しき事を見ざりしにより、かの書生心のうちに、「鬼我を恐れて去るよ」と少し謾心を起こして、ある夜、厠へ行きて、手水を使わんと、手水鉢の杓を挙げけるに、其下より大なる鬼の手出で、書生を捕へければ、(3ウ)離さむと動揺すれども少しも動かず、惣身汗出身の毛立ちて、手足働く事能わず。人を呼んとすれども、口吃して其声出ず。其時、空中に声ありて、「おもひしけるや。」と云ふかと思へば、其俣引つかんで、投げ倒しけるに、砌の上に打ちつけられ、面を破りて息絶たり。それより、人いよいよ恐れて其辺を往来する人も稀なりしに、其頃

三宅尚齋、禄を辞し京に帰り、家を求めんと（4才）
 （4ウ・5才 挿絵1）せしに、思わしき屋舎も無かり
 ければ、幸住居も広ければ、「これを求めん」と望ま
 れしに、其主人、右の咄しをなして、「御望ならばとも
 かくもし給ふべし。」と云ふ。尚齋笑ふて「我黄
 吻の輩と同じからず。」と、即ち求め、はや其
 家へ移けるに、何のこともなかりしに、頃しも、長
 き秋の夜なれば、燈をかけ、書を読み居たりしが、
 不図思ひ出し、一絶句を壁の上に写しける。其詩に
 曰、（5ウ）

荒屋無^レ人鬼脚驕^ル 佩^一刀携^テ到^ル驅^ニ真妖^ヲ

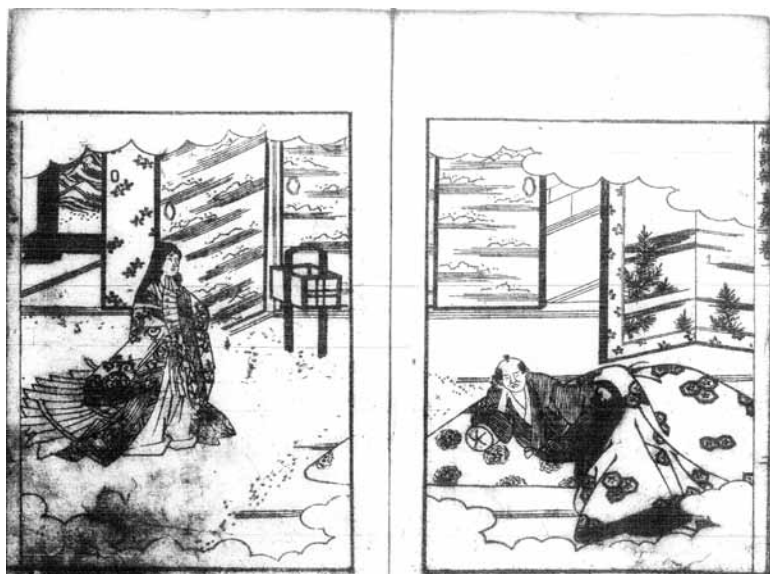
従来胸上存^ス正氣^ヲ 何物令^ニ明心自^ラ撓^サ

自らも其作のよく言得たるを喜び、再吟して、樂し
 み居たりしに、壁の中に声ありて、

かたらずとおしへし道のあるものを

まもらですめる人ぞはかなき

といふ声せしに、尚齋劍架に掛し刀を横たへ、
 壁を白眼で坐し居たりしに、おもいもよらぬ後ろの
 屏風の陰より、大の法師現われ出でて（6才）尚齋の



髪を掴んで、引倒さんとするを、元より學術のみならず、武の道にも達し、早技に慣れたる者なれば、そのまま身を躲して、拔手も見せず、切つけしに、其俣消へ失せしにより、奴僕を呼びて、燈をとぼし見るに、鮮血したひて、兩戸のかたより、庭の楊柳の木の後ろへ至りしに、大なる石有りて、其下より洞穴の如く、窪になりし所有りて、その石を除けて中を見るに、大なる古狸死しいたり。これより其怪止みしかや。(6ウ) 君子評して曰、「聖人は其けやけきをなさず」と云へば、尚齋の好んで求められし、其失なりと云へり。

古狸多く怪をなす。しかれど君子に災ひする事能わず。尚齋、其徳未だ中和ならざるが故、妖怪近づく事を得たり。仁齋先生、父子席にあれば、妖術者もその術を施す事を得ず。是多く人の口碑にありて知る所なり。東涯先生丹州山道の妖怪住める屋敷に宿せしこと、閑散余録(『閑散余録』)卷二にいだ(7オ)せり。妖は徳に勝たずと云へる事を知るべし。

卷一の二「一奸猾豪商を欺く」

京師三條街、鍋釜商あり。豪富を以、名あり。其家新たに妻を喪けるに、忽一人の道士來り告曰く、「貧道此頃道を修行の爲羽黒山に上りしに、途中にて一人の婦人我に云ふて曰、「都へ上り給ふならば、寄語申べし。我罪業深く、度脱を得難し。願くは家人に告げて、月牌の資を高野山へあげ、我が冥福を薦くれ(7ウ)よ。」と云いしまま、其所を問ば、尊眷なる由。「若、家人不信は、これを以印となしくれよ。」と綵帛一塊をいだせる故、今持きたり申。」と云い捨てて去んとするを、家人蒼遑て挽留め、膳具を供て敬礼し、また金子を包み、「とてももの事に高野山へ送り下されよ。」と願しまま、道士も辞することを得ず許諾、主人大きに喜び、別に金子若干を封して、道士に布施す。道士、是を懷中して、暇を告げ去。

一小廝あり。年十七八ばかり。もと(8オ)より道士の云しことを怪しと思ひて、あとより道士の行く所にしたひ行くに、三条より東へ京極をすぐに伏水路へ向か

ふ。遽(こはか)にして、西へ振り返り、朱雀街(せんぼくかい)を北へ上り、北野七本松へいたり、一草舎(ひとくさのいへ)に入れり。小廝(せうし)も従ひ入るに、冶婦(てりおんな)あり。小廝(せうし)を見て、錯愕(さくおつ)逃げ隠る。これ釜屋(かま)さきに置く処の婢(めかけ)なり。妻の病(やまい)とき、来り問ひしが、其時、綵帛(さいおく)を盗しものならん。小廝其奸(せうし)だくみを旁隣(かみじよとなり)へ告げ報せ、大に罵愧(のりはじ)しめて帰る。家人初めて、(8ウ)その奸計(かんけい)にあたりしを悟(さと)ると云ふ。

嗚呼、一小廝(せうし)もと学才(がくさい)なきといへども、其本心明らかにして、妖妄(ようぼう)の欺(あまひ)きを悟りてその奸狀(かんじやう)を現す。いわんや堂々たる大丈夫をや。しかるに漢武の樂大(らくだい)〔『史記』卷十二「孝武本紀」〕における、宋徽之(そうけい)の靈素(れいそ)〔『宋史』卷四六二「方枝伝」〕における、皆甘心(かんしん)してその欺(あまひ)を受く。嗜欲(しよく)これをおふて、天、其明鑑(めいかん)をうけべきなりと、東涯先生(とうがいせんせい)の蓋簪録(がいさんろく)〔『蓋簪録』卷二「紀実編」〕にも記し置れたり。世の奇怪(きくわい)と称するもの多くは、(9オ)この如きこと多し。それは是を見て悟るべし。

卷一の三「清女の靈田夫を諷す」

天明年中の頃、讃州丸亀府(さんしゅう まるかめ)負郭(せうかちかき)邑(むらじ)、一田夫(ひとくしやう)あり。其田畑(でんぱた)の直中に一壘土(いんしち)ありて、古よりこれを古塚(ふるづか)と云伝へて、あへて鋤鍬(ききく)を入れざりしが、彼もと豪腸(きやうたう)の聞へありけるが、「我、田畑のうち地を無易(むえき)になしおかんも本意(ほんい)なし。たとひ古塚たりとも、我、田畑を耕作(かうさく)せんに、何の恐れかあらん。」と奴僕(めぼく)に命じて、其所を破壊(はくわい)しめ、その(9ウ)田畑と共に平坦(へいたん)ならしむ。其夜、田舎に目馴れぬ衣裳(いさやう)したる、いとなまめける女の枕もとに來りて、一首の和歌を詠じけると覺へて夢覺(ゆめさ)めたり。田家の暇(いとま)なきに紛れて、心に触れずうち過しに、又あくる夜も前に同じく、夢見けれども、只朴訥(はつねつ)の男なれば、歌をも記し得ず。心に挟まずうち過しに、其あくる夜も、又かの女來りて云けるは、「此間より汝に云ひ聞かせる歌を覚へ侍るや。」と問。かの男答て、「我、物(10オ)(10ウ・11オ)挿絵2) 学びし事も侍らねば、ゑ記しうる事能はず。」と云ふ。女うち笑みて、かの歌を二三遍(さんへん)もうち吟じて、「よく記得んや。」と云ふと、其



巻一・10ウ～11オ 挿絵2

俣、夢覚めたり。奇異の事に覺へて、翌朝、里正かた
 へ行て、その子細を語りしに、里正驚て、「是、神
 靈の塚を毀てるを悼み給ふならん。」と云ひて、其由
 を邑吏に申す。邑吏も奇異の事に覺へて、其長官に
 告、終に侯の聞に達す。侯もと和歌に志深く
 冷泉家の御門弟なれば、則（11ウ）其歌を写して、
 吏に命じて、京にいたらしめ、「頃かやうの古歌
 を得候。いかなる人の歌に候や。」と、冷泉家へ尋ね
 給ひけるに、冷泉殿御答に、「此歌実に只人の詠み
 給べきとも覺へず。其口調をあしおふるにまさしく、
 清少納言の遺風有。しかれども、家集に見へざれば、
 それとも定め難し。」と仰られしにより、古へより
 庫府に収むる州志を点検するに、はたして清少納言
 の墓所なり。吏に命じて、これを掘りしに清女墓
 といふ碑石出た（12オ）り。いよいよ疑ふ所なしと儒
 官に命じて、その由を記して、改め築かしめけると
 なる。その歌左に記す。

亡き人のしるしは苔に埋もれて なくてもよしや
 ありてしもがな

此事、新井白峨『牛馬問』にいへる、「静の霊、田夫に付きて歌詠みし」(『牛馬問』卷一「静が墓」と大に同じて少しく異なり。清女の墓讃州にあり。静女の墓阿州にあり。みな疑ふべきものなり。しかれども、此二事杜撰の人の怪奇を語ると同じからず。余別に論ありて、(12ウ)ここに録せず。其文長ければなり。

卷一の四「成田治左衛門亡妻と枕衾を同じくす」

享保年中、大坂谷町辺に住める浪人あり。もと西国方の侍なりしが、故ありて国を立退、大坂へ来り、新陰流の武術を指南して生計をなす。後妻を迎へたりしが、夫婦の仲睦まじく、実に瑟琴を弾くが如くなりけるが、彼妻ふと風の心地にて例ならざりしが、次第に病□おもりて、今は医師の助けも便りなかりければ(13オ)、治左衛門大に嘆きて、日夜枕もとを離れず、悲しみけるが、次第に飲食も喉に下らず。命も旦夕に迫りしに治左衛門を呼んで、手を取、顔うちまもりて云ふやうは、「君と醺酒を酌み交はしてよ

り、互ひに百年も添ひ参らせんと契りしに、妾、不幸にして中途に別れ参らせん事、其悲しみ云ふに尽きる事なし。若し、君妾を捨て給わすは、たとひ形骸はむなしくなりぬとも、魂魄は此処に留まり、君と偕老の契りを為し参らせ(13ウ)申さん。」と涙と共に云ひければ、治左衛門も共に嘆きて、「汝より生残る我悲しみ、腸を断が如し。しかれど、有為転変の世の習ひ、嘆きても甲斐なし。若其言葉違わずは、猶死しても生るに同じ。」と云ひければ、妻うち笑みて、世にうれしげなる顔して、「幸に君の捨て給はざるを辱なふす。しかし他に漏らし給ふ事なかれ。」と云ひて、息絶たり。治左衛門、大に嘆き悲しみけるが、かくてもあらざれば、形(14オ)骸を寺へ送りて、葬俚の礼をなしけるが、その夜より妻来りて、治左衛門と枕を同ふして、生るときの如く、少しも変わる事なし。初めの程は愛着に溺れて、何とも思はざりしが、日数重なるに従ひ、心よからざる事に思ひて、其知己門弟へは、播州回りと披露して、播州しるべの方へいたり避けければ、其夜、又妻来りて、「君

妾と深く契り給ひて、今心變はらせ給ふ事の恨めしけれ。君何方へいたり給ふとも、(14ウ) 日本はおろか、支那、印度までも從ひ参り申べし。君、妾を捨て給ふとも、妾、君を捨て参らせまじ。」と云ひて、其来る事猶止まず。詮方なくて、また大坂へ歸りけるが、是を避くるに術なく、又他に漏らさじと契りしことなれば、口外せんも恐ろしくて、只ひとり悶へ苦しみけるが、次第に氣衰へて、人にも会はず、引こもり打臥し居たりけるが、朋友四五輩、治左衛門が病めると聞て訪 来たりしに、奴婢、人に会い給ふ事を嫌ひける由(15オ) を告げるに、皆武を専らにする者どもなれば、「児女子の病めるが如く、人に逢を嫌ふ事何ぞや。我らは苦しからず。」と推して治左衛門の病床に至りければ、治左衛門驚き、涙を流して、「我図らずも、疾を受けて既に迫れり。公等に対面せんも、はやこれぎりなるべし。」と云ふ。其形体、肉脱皮焦、氣息短急なり。みな是を見るに、其相好いと奇怪にして、鬼魅の災ひせるが如くなれば、「必怪事あるべし。包まず次第を(15ウ) 語べし。」と懇ろに

云いければ、治左衛門も打ち明、始末を語らんと思へども、「婦と固く契りしに、人に語るまじと云いしことなれば、如何せん。」と狐疑猶予せしに、再三声を揃へて問ければ詮方なく、婦と契りし始終を語りければ、みな驚云ふようは、「是、足下愛着の深き故、狐狸災ひをなすと覺へたり。死したる人の再び来らんいわれなし。幸に我らの罷有。除かずんばあるべからず。」と其夜光燭を焚きて、あたか(16オ) も白昼の如く、みな治左衛門の傍らに連座して、今や妖怪の来るかと待ち居たりしに、夜半の頃、治左衛門苦しき悶へければ、みな今こそ妖怪の来りけるよと、刀を抜きて、空中を掃へども、当たるものなく、また怪しきものも見へざりしが、治左衛門ついに絶へ入たり。皆驚助けて葉など与へしに、よふよふにして息出たり。治左衛門涙を流して、「我公等に言を漏らせしを以、婦大に怒りて、我命を絶たんと云いて、帰れ(16ウ) り。公等、幸に千万歳を保給へ。」と云ひて、終、其明日死しにけり。実に奇怪の事なりとかや。

古より声色に沈冥して、其怪妄を信じ、正心を失ふもの漢武帝、唐の玄宗の類少なからず。人心もと不昧にして、明らかなりと云へども、物欲これをおふをときは、終其時を失す。声色の物欲より甚しき、またさらなり。松崎惟時小説に「武人の子、猫を殺して、是が為に悩まざる、其伯父の謀り事（17才）にて、終其迷ひ暗れしことを記されたり。（正しくは惟時の父、松崎觀瀾の『窓のすさみ』巻二）治左衛門の友みな武を好みて學術なし。惜しひかな、終に彼をして迷死せしむること、実に憐れむべし。（17ウ）

怪談弁妄録卷之二

卷二の一「妖女樵夫と匹配となる」

越前の国、洞穴山といへる深山、古しへより樵夫、雲遊僧、過るもの偶々治妖の婦人に逢ふ者あり。その形容娟妍くして、人の心をとろかす。是に逢ふ者、必ず半身不随と云ふ。もし女、左より来たれば左しびれ、右より来れば右しびると云ふ。

享保の頃、大野府の樵夫、甚八といふ者彼山へいたるに、女出で来り。かねて聞居し（1才）事もあれば、心の中甚憂へ居しに、かの女そば近く歩来り。甚八を視て、微紅上面、誠に深奥育し室女の如く、いと艶美なる其さま、画がきし西施といへども、これには及ばじと思ふ程なり。樵夫も聞きしに違ひて、何となく心恍惚として、女に云ふて曰く、「女姓は何くの人ぞ。」と問へば、女、「我この山に住める者なるが、未だ定まる夫なし。幸に君捨て給はずは、偕老の契りをなし参らせたく、（1ウ）これまで迎へ参らせさむらふ。」といと優しいげに、云ければ、樵夫初めの恐ろしきも、うち忘れ、何となく春情動きて、伴ひ往しに、石を以て扉となす門の中へ入けるが、その奇麗云ふばかりなし。下婢とおぼしき者出で迎ひて、「嬢子御帰り。」と云ふ。直に玉食美酒を調へ出しけるまま、心よくこれを喫して、其夜枕席を共にして、臥しけるが、其より家に帰る事も忘却て、一月計も過ぎし（2才）に、女云ふよりは、「君今一度家に帰り、調度など持来り給へ。」と云ふによ

り、家に帰りしが、女のこと、しばらくも忘れ難くて、速やかに又去れりとかや。もと此樵夫独り身にて、父母妻子もなかりし故、誰止むる者もなかりしとなり。其後、山を過ぐる者、かの男にままだ逢し者も有となり。里人の奇談なり。

散楽に山姥あり。世に伝ふ一休和尚の作る所なりと云ふ。癸辛雜識（南宋末元初・周密撰「癸辛雜識」、未見）に云ふ、豈宜以西（2ウ）南丹の諸蛮に野婆といへる獸あり。其かたち黄髮垂髻にして、跣足裸身なり。儼然たる一嫗なり。其類みな雌にして匹偶なし。男子に逢ふことに、必負去て交合を求むといへり。北鄙の妖女もこの類ならん。しかれど、里人の言、兒女子の話説なれば、弁を贅するにおよばず。

卷二の二「天狗の喜兵衛大蛇を截る」

撰の西北、兵庫といへる一都会あり。そのところ（3オ）住める、喜兵衛と云樵者あり。この者、天稟雄猛にして、力あくまで強かりしが、その

辺、三里隔て、愛宕の觀音といへる靈場ありしが、この徑途甚だ迂路にして、參詣の人ならでは至る人なし。十七八日は御命日と云ひて、人多く至れども、常は甚だ人稀なりしが、その頃此途に妖怪出ると云ひ伝へしを喜兵衛聞て、「何がな、ことあれかし」と思ひし矢先なれば、うれしく思ひて、ただ独り、かの愛宕（3ウ）へ参りしにも、はや二里余も来りしと思ひしに、山径ものすこく、吹あらしも身にしむかと思はる。人の通ひも絶し所に伐木丁々の聞へし故、近く進み見れば、年頃十六七の小僮大ひなる斧を持て、大木を伐こと自由自在なる事、神の如し。喜兵衛心に思ふに、「我も年来樵を業とすれども、いまだ此小僮に及ばぬよ」と独言して、前後を忘れ見居たりしに、かの小僮つかつかと喜兵衛の前に（4オ）来り、「爾何者なれば、此所へ来るぞ。」と云ふ声と等しく、かの斧を持つて、打つてかかる。喜兵衛こととせず、身を躲し、かの斧の柄を掴んで、互ひに揉みあひしが、喜兵衛が力や勝りけん。終に斧を捨て、遁んとす。喜兵衛かの斧を以て、小僮に撃つけし

が、其まゝ林の中へ入りて、飛鳥の如く、いづ地ともなく消うせたり。撃附し斧、かの小僮に当たりしにや、鮮血流れて、林中へ伝ひあり。斧を（4ウ）そのまま捨て置き故、喜兵衛これを肩に負て、観音へ詣で、家に帰りしが、里人、伝称して、皆畏れて名を喚ず、天狗と異名を付けけるとかや。其後かの斧を持て木を伐に心のままに力を費やせず、二人前も倒しければ、自も大に悦けるとなり。

またその後、近き寺の堂、震せざるに、夜毎に動揺ければ、寺僧ら甚怪しみ居たりしに、ある時、寺僧風に起きて、方丈の戸を開き見るに、堂の前に（5オ）大なる石の湛水ありしに、其上に大なる蛇の頭見えければ、驚き恐れて如何せんと騒しに皆、「天狗を頼むべし。」と云ひしにより、人を遣はして、其由を語りければ、喜兵衛心よげに出来りて視れば、大蛇睡眠して、頭を石にもたせゐる体なりし故、かの斧を以て、頭をさんさんに撃砕きければ、何かは以てたまるべき。大蛇は其まゝ頭砕けて、惣身蠢ども害を成すべきやふもなかりしかば、七八斬

にして、溪（5ウ）へ捨てしとなり。その名遠近に響きて、諸侯より召さるれども仕へず。尼崎侯、明石侯にも甚召抱へたき由にて、懇望なりしかども、卑賤ものに生れつきし故、官途のこと覚束なしとて仕へざりけると、かの里人の物語なり。

澹臺滅明の蛟を截（『博物志』卷二）、周處の猛虎を射殺せし事（『蒙求』周處三害）、唐土にも記伝て、その彊勇を称す。喜兵衛の如きものなきにしもあ（6オ）（6ウ・7オ 挿絵3）らず。しかれど、怪は我これを知らず。蛇を截しによりまた附会して、里人その豪彊を称せんとして、怪を云ふものならむ。世人奇を好み、怪を談するを喜ぶ故に、多は微細の事も大ひに云伝るものなり。

卷二の三「客笛を弄して野狐感ず」

長州城負郭一村、一買家あり。松屋甚太郎と云ふ天性、横笛を好んで、艸角の頃より明け暮れ、是を弄び、楽しみとしければ、家業を（7ウ）も治



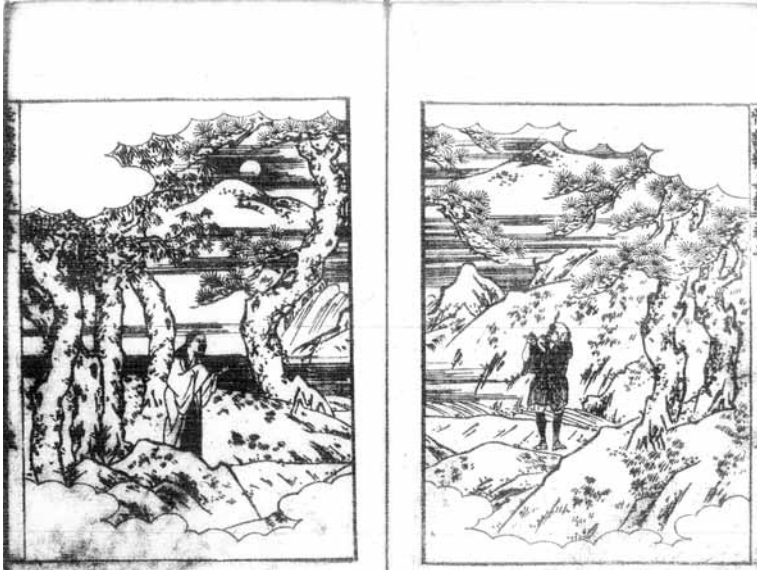
巻二・6ウ～7オ 挿絵3

めず、夜中といへども、合壁^(ごうへき)の夢^(ゆめ)を驚^(おどろ)すをも思はず、吹きすさびし故、自然^(ぜん)とその堪能^(かんのう)を極めしかども、その家事^(かじ)をなさざれば、次第^(しだい)に家貧^(いへまう)しうなりて、朝夕の烟も絶だへなり。婦これを嘆^(なげ)きて、いさむれども、聞入ざれば、親族^(いっしよ)寄り集りて、里正^(りせい)を頼んで、その技を止めさしめんと、固く戒めけるによりて、我舎^(わがや)にて是を弄^(う)する事能はず。もとより好の道なれば止むることを得ず。(8オ)夜深におよんで、秘かに舎を出、あたり近き山へ至り、何の恐れもなしと喜び吹きすさび、^(の)樂しみけること度重なり、自もその所を得たりと歎び、日の暮れるを遅しと待ちわびて、夜毎に通ひけるが、またいつもの如く、かの山へ上がりて、是を吹きさびて、^(ひり)独樂しみ居たりしが、頃しも春の末つた、闇はあやなき空の景色、夜も参半過ぎて、山の端より出る月の光りに、若草の色青めきて、東風(8ウ)^(ひか)吹嵐に、山櫻袖に散りかかりし其有りさま、「げに、春宵一刻價千金」(蘇軾「春夜詩」)と口ずさみて、笛を吹き鳴らして、^(ふ)樂み居たりしに、向かふの木影に人の姿見へしかば、「我ならで、誰、夜深きに

来れるや」と、怪しく思て、笛を止たりしに、近く進み来たる有さまなれば、何とやらものすごく、今まで楽しみ居たりしも興ざめて、「かようの僻なからましかば、此山中へ来る事もあらじ」と、独り悔て震慄て、笛を腰に挟み（9才）、足早に山を下らんとするに、彼もの、はや前に来れり。そのさま七十余の老人、白き服を着し、藜杖にすがり、甚太郎を視て云ふよう、「余り笛の音の面白く候ま、これ迄参りさむらふに、何しに止め給ふぞや。今一曲吹き給へ。」と望みしかども、甚太郎は何の返答なく、只、震慄て逃げんとするを、かの老翁咲曰、「恐れ給ふことなかれ。我、人を害するものにあらず。そのもとの笛の音、天性、其道に志深（9ウ）き故、その妙なる妙なる、世人の及ところにあらず。」と称美しければ、甚太郎もよふよふ氣を治て、「これは思ひもよらぬ賛を被り申すものかな。老人は何方の御人なるや。」と尋ねしに、「某甲は非人。」と云ふにより、「偕は山神の我技を愛し給ふものならん」と心うれしく、また、「御性名は何と申候や。」と云ふ

に、さし俯いて、しばし返答もせざりしが、ややあつて、頭を上げ、「我もこの山に住める野狐（10才）ながら、数千載の星霜を経て、神通を得、仮に老翁と化し、来るものなり。今より心おきなく、笛を吹給へ。我も好の道なれば、来り望申なり。必ず恐れ給ふことなかれ。」と云ふて、そのまま消失たり。

夫より、夜毎に、かの老翁来りて、笛を聞き居たりし故、いつとなく懇篤なりて、ある時、甚太郎云ふよう、「この辺は、古、源平の戦場なるよし。老翁には定めし、目のあたり、その有（10ウ）さまを見給ふべし。請語り聞せ給へ。」と云しに、老翁、「なるほど其時の事、詳しく見申て候。話説のみにては、今一際行き届き申さぬ事なれば、我眷属多ければ、彼等をしてそのことを為しめて、御目かけ申べし。今日より七日過ぎて、此ところへ来り給へ。」と約し、別れ去れり。甚太郎、其日遅しと俟わびて、屈指て、これを数ふれば、はや七日目なれば、宵より山へ上り居たりしに、程なく老翁出来れり。互ひに（11才）（11ウ・12才 挿絵4）采葛之情（『詩経』「采葛」）を述べ



卷二・11ウ～12オ 挿絵4

終て、老翁云よふ、「今宵合戦の次第を御覧に入申べし。しかし、一滴にても涙をもよふし給事なれ。もし愁涙もよふし給はば、それきりなるべし。」と云終りて、なにやら指揮する体なりしが、程なく東の方、東雲近く、白みわたりて、山上水なきに、海水漫々として漲涌て、兵船数百艘浮び出たり。陸の方にも、白旗、飄然として、源氏の大将、源廷尉義経を始として、豪雄ならび居た(12ウ)りけり。平家の方にも能登守、其外の勇将弓矢を手ばさみ、待ちかけしが、次第に乱軍となりて、平氏、大に討ち負け、安徳帝、入水し給ふ有りさま、あまりの御いたはしさに、耐へかね、思わず愁涙を流し、声を揚て、悲ければ、今まで有りつる源平の両陣、烟の如く散じ、霧の如く消えて、忽ち黯然無色なりけるに、范然として、仰首て、空を見れば、経星の光あきらけし。辺りを見れば、老(13オ)翁、咲日、「君、愁涙をもよふし給ふ故、既にかくの如し。」と云。甚太郎甚だ惜しめども、詮方なし。終に家へ帰りしが、「何とぞ、今一度、そのあ

とを見ればや」と思ひて、心つきしまま、かの狐の好めるものは、鼠の油揚なれば、これを拵へ、数百頭を清き筥に入て、いつもの如く、かの山へ至り、相待つに、老翁来たれり。甚太郎、昨夜の勞精を謝し、右の品を出して、云ようは、「是は些少なから、御眷属方へ御分ち（13ウ）、よろしく謝し給はれ。」と差し出しければ、老翁、大に悦謝しければ、甚太郎云ふよう、「近頃、御無体ながら、昨夜のあとを、今一度見せ給へ。」と望みしかば、早速許諾して、「七日目にまた来るべし。」と約し、別れしが、此度は友をも伴ひたき由を頼みしに、「二人も二人も同じ事なれば、兎も角もせらるべし。」と云ひしまま、その日暮過ぎより、かの処へ、友四五人伴ひ至りしに、初更二更過れども、老翁出で来らず。如何の事なる（14オ）やと、甚太郎友の手前も気の毒なれば、腰に挟みし笛を取りて、「いつも此笛さへ吹けば、老翁来たれり。」と云て、暫く吹ども、何の音もせざりければ、いよいよ不審し、「いかなる事ぞ。」と云ふに、友のうちに、「甚太郎、我らを欺し。」と怒る者もあり。ま

た、「人を欺騙す男にあらず。また、明夜来るべし。」と云ふもありて、大に騒ぎけるに、甚太郎、甚だ気の毒に思て、いろいろ宥め詫びけるが、中に「甚太郎面晴らしなれば、柴を（14ウ）束ね、これを灯して、松山を探すべし。自然、老翁の棲洞もあらば、共に頼むべし。」と一同して、山を探しみるに、棲洞も、知れざりしが、よふよふ東雲近くなりけるに、谷の中に、白き筥の見へしまま、甚太郎、「これ我が贈りし物なれば、この辺りこそ、老翁の棲家ならん。」と、藤葛をよちつたひて、下りてみれば、筥のうちに鼠三頭を余してありしが、かの巖の後ろに年経たる白狐死し居たり。「これ数百頭の鼠を外の狐に与（15オ）へず、皆ひとりして、喰つくさんとして、食傷せるものならん。」と云へり。畜生の浅ましきは、己が好物故、味わひの甘を惜しみ、外の者に与へず、ひとり食尽さんと欲して、其命を失ふことを知らず。甚太郎は、是を嘆き、「もし此ものを与へずは、性命を喪却はせまじきものを、千載の星霜を保てる狐を殺せること、恐し」とて回国せしと也。

此等の話説、弁断をまたず、只、児女子の燈を剪て、夜話するものに語り聞かすべし。(15ウ)

怪談弁妄録卷之三

卷三の一「小女鬼物を視て一疾を得たり」

摂州河辺郡の西北に銅山あり。浪華葉屋佐兵衛といふ者、売用ありて此処に來り、農家に宿り居しに、其隣家の小女歳十九。夜、近舎へ往て歸るに、途中にて大に呼び泣く声せしに驚、その兄なる者出で、抱護て迎りを見れども、人の影もなし。小女はそのまま氣を失へり。因て家内の者、医者など頼(一オ)みて藥を与へて、やふやふにして正氣つきし故、其訊を問へば、「歸るとき遽に酒水せしが、後より丈余坊主、大なる黒手を出せしと覺へて、息絶たり。後は知らず。」と云ふ。それより、小女腹中一塊物ありて、脇下に引つり、痛忍べからずと云へり。明和の頃なりと云ふ。

これその疾発として致すところなり。形あるものを視るにあらず。形なきものを視るのみ。瘡

及熱病を病むもの鬼を視る(1ウ)と同事なり。秦越人、二十難曰、「重陽のものは狂し、重陰の者は癩す。脱陽の者は鬼を視。脱陰のものは目盲す」と云へり。(『黄帝八十一難經』「二十難」)

卷三の二「訛言庸人を惑し乱す」

京師、貞享四年丁卯七月十八日の夜。既に参半の頃、一蒼頭、遑遑して人の門を敲、「今夜毒あり、井の内に生ず。急に水を汲べし。」とて報せければ、皆何の故を知らず。しばらくして、親家四隣互ひに告報せ、急に(2オ)水を汲て、甕缶木桶の類に満貯て、頃刻の間、往来旁牛、互に相告報して、京中に及び、負郭村落一二里の間、戸々家々汲貯て、朝に及ぶ。それ誰が云ひ出せしと云うことを知らず。これ訛言ことなり。また宝永年中、只いつとなく鬼物ありて、人家にある処の石うすの界を鑿洗と云。その言、賀越の間より始まりて、畿内海西みな然らざることなし。また訛言なり。僧兼好の(2ウ)徒然草に應長の頃、鬼のことを記せる

『徒然草』第五十段と同じ事にて、みな人妖なり。

唐土皇祐年間蘇州の民家、ある夜人ありて、その
 牆壁に悉く怪き文字を記す。一夕の間、数万家
 残すところなしと、沈存中筆談（『夢溪筆談』卷二）
 に記せり。古しへ聖人造言の刑あり。妖術の
 禁あり。誠に深意あり。愚民の心、本知識
 なく、揺動し易が故にこそ。經濟に志あるもの知
 べきことなり。（3才）

卷三の三「野狐俠客を欺く」

明和年中、大坂城南郊野木津村に俠を好み、
 日夜、山野に狩して楽しみとする、田夫平蔵と云者
 あり。年未だ壮に満たず、只、客氣縦横して、強
 をもつて、人の上に立たん事を好む。

ある時、村中の壮者等寄り集まり、怪談を為す。
 一人進み出て曰、「城南阿部野に古狐ありて、人を
 欺き誑かす事、いく人といふ数を知らず。多くは髪
 を剃、元頭となす。人恐れて薄暮より（3才）人行こ
 となし。」と云ふ。平蔵これを聞て、「我、年来、山野

に狩して、深夜に処々を遍歴すれども、未だ怪異
 を見ず。阿部野の野狐、何ぞよく我にあたらんや。
 妖は人によりて怪をなすと云へり。我、世人の爲に
 かれを除かん。」と云。其勢ひ、甚盛んにして当たるべ
 からず。皆々、其言葉を聞て、平蔵の強を感じて止ま
 ず。中に年老たる者、「かの野狐、なかなか尋常のもの
 にあらず。恐らくは災ひあらん。只一時の（4才）豪
 言をもつて進まん事不可なり。」と止むれども、平蔵
 聞入ず、「我、今宵かれを繋ぎ帰らん。」と云ふて、席
 を立ちければ、終止むる事能はず。中に好事の男進み出
 て曰、「もしし至り給ふとも、印なくては如何なれば、
 古、渡辺綱が金札になぞらへ（謡曲「羅生門」）、
 是を樹に結びつけおき給ふべし。」と、壺封の文を与
 へければ、「実に尤なり。」と同じ、文を懷中して、程
 なく、阿部野へ行見れば、秋の末つかたなれば、月の景
 色（4才）もいともものすごく、草むらに鳴虫の音より
 は、只、松吹風の音森々として、心細げなり。平蔵、
 其辺を徘徊して封書をいづれの木に結びつけおかん
 と辺りを見れば、林の木の人に人影見へければ、「さて

こそ人の噂に違わず、これ野狐なるべし」と、近く進み見れば、七八人も寄り集り、藁竹などを束ね、いと怪しげなるものを拵へ居る体なり。平蔵、是を見て叱曰く、「野狐、庸人を欺くとも、何ぞ（5才）我を欺き得ん。」と云ふて、林中に入れば、みな驚き恐れて、低頭平身して、忸人、平蔵に礼をなして曰、「我々御明察の通り、野狐にて御座候が、我等邑の大保長に、今宵、新婦を迎へらるるよし。先年、我等、負欠の事につき、情けなくもはからいける。其恨み、骨椎堪へたり。今宵、新婦に先立つて、彼が家へ至り、欺き鬱慍を散申さんと存じ、かやうに寄り集まり居申候（5才）処、はからずも大爺のために咎められ、恐れ入候。何とぞ、御見逃し被下候はば、生々世々、永く御恩忘れ申まじ。」と懇懃に述べける。其有さま、人の如く見へければ、平蔵、心に思ふよふ、「我、始め来りし時は、若、野狐出で来らば、繋ぎ帰らんと思ひしかども、かれ礼を施し詫ぶること優しければ」（と）、少仁心を起こして、あへて害心を挿まず、自らも其俠を謾し、「我なればこそ、かく恐れける

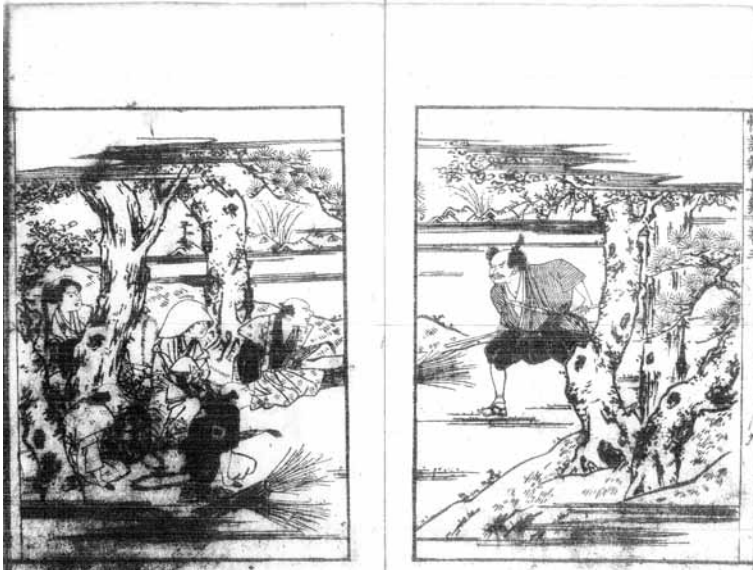
よ。」と思ひ、其まま（6才）帰らんと思ひしかども、「かれらが我を恐れしも、話の種なれば、後日の証拠に此封書を、人の取難き木に結びつけん」とて、平蔵、莞爾笑て曰く、「汝、多くの人を欺きしと聞て、我、汝等を捕へ帰らんと思ひ来りしかどと懇懃に断りを述る故、其俣さし置所なり。もし、悪しく働かば、又来るべし。しかし、我、朋友と争ひし事あるにより、此封書を人の力及ざる所へ結びつけくれば」と云ければ、「かし（6才）こまり候。」とて、其まま、一二丈もありし松の末の枝へ結びつけければ、平蔵、既に帰らんとせしに、「また必ず此御沙汰、御無用。」と云ひければ、平蔵、「その大保長といふは、何方なる。」と尋ねれば、岡村の大保長なるよし申けれども、外人のことにて、我身にかからざる事なれば、其まま、急ぎ宿所へ帰らんと、道を急ひて歩みしに、帰路思わず、かの大保長の門前を過ぎければ、心に「これなるべし」と門内を見れば、燭の光、瑩々として、白昼の如（7才）く、新婦の来るを待ち居体なり。其まま過ゆかんと思ひしが、よくよく思ふに、「野狐が願し

とて何の義を立つることかあらん。かれは畜性なり。是は今宵、新婦を迎へ人の大札をなさんとするに、野狐に欺かれなば、なんぼうか口惜しかるべし」と跡へ立戻り、案内して門内へ入ければ、青侍、出向て、子細を問へば、平蔵手をつき、「私事は、木津村の百性、平蔵と申者にて御座候が、朋友と争ひ、阿部野へ参り候処、林の中に何（7ウ）やら怪しきものを拵へ居る体故、近寄りて見候へども、尊家に醜礼ある由にて、災ひを為し申さんとたくみ候訳、悉く相語り申候。しかし、此沙汰致しくれまじき様申候得とも、大札を畜のために妨られ給ふ事、笑止千万に存じたり、御報せ申上候。」と述べれば、其由、奥へ通しけるに、年頃三十余りの士、提刀にて出来り、眼を怒らし、はつたと白眼、「汝、何等の痴保なれば、我等屋敷を恐れず、今宵、吉事の場合（8オ）へ妖言を吐き、衆を欺き得んとするや。その罪許し難し。今、手討ちになすべき奴なれども、大札の妨げを憚り、しばらく許しておく。猶、後日糾明すべし。」と青侍に命じて、門前の木へくくり付けた。平蔵その冤を訴たふれども、誰助

くる者もなし。

折節、門前を僕を連れて急ぎ行僧あり。平蔵、声を上げて呼ぶにより、門の内へ入て、これを見れば、大木にくくり付けられて、苦痛を訴ふ。よつて、（8ウ）其始末を尋ねれば、かの次第を詳しく語り、大保長の怒りにあひし事を告ぐ。かの僧、是を聞て、甚、気の毒に思ひ、段々詫びけれども、なかなか聞入べき体なし。いろいろと詫びければ、「僧の云かけし事を其俵捨て置くもよろしからず、此上は其僧の弟子に致さるべし。」と、やふやふ納得しければ、そのまま席上にて、髪を剃けると、四方よりどつと嗤ふ声こだまへ響きて、ものすごく聞こへければ、平蔵、初めて気（9オ）（9ウ・10オ 挿絵5）づき、辺りを見れば、髪落散りて、草の上に座し居たり。齒嚙みを為して、無念がれども、其甲斐なし。はや暁の鐘の声遠く聞こゆれば、詮方なくて、よふよふ家へ帰りけるが、其後正気なく、只氣拔けし如くなりといふ。

野狐の精、よく人を欺くこと諸書にいだせり。瑯琊代醉篇（明・張鼎思撰『琅邪代醉編』、未見）野狐



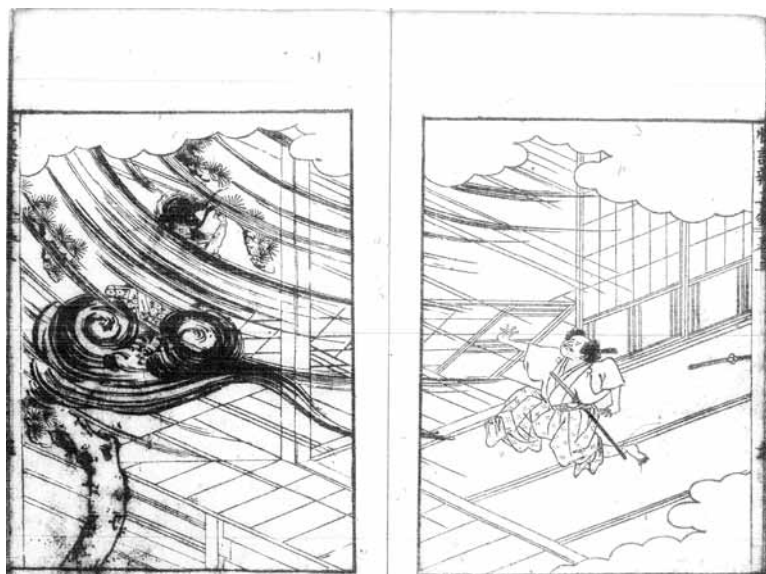
卷三・9ウ～10オ 挿絵5

髑髏を頂き、北斗を拝して、よく人に化す。好んで美婦人と(10ウ)なり、淫夫を誑かすと云へり。多く怪と称するもの、みな狐狸の類なり。しかれども、兒女子あるいは男子の智浅き者ならでは、欺く事を得ず。人は万物の靈と云へども、またよく古狸野狐のために惑はさるるは、その智の足ざるが故なり。古より大丈夫の欺かれしを聞ず。野史、明智左馬之助、入江長兵衛、山野に狩して、旧狐を殺せしに、長兵衛が子、智足ざるによつて、其報ひをな(11オ)せしを見るべし。〔絵本太閤記〕四編卷六

卷三の四「大木悪善天狗と力を角ふ」勢州、洞津侯の臣、津田道之助は、関口流の柔術に達し、元祖柔心以後の上手にて、侯の御師範たり。隠居して名を風心といふ。

ある時、一人下婢を召抱へしに、此女、折々道之助に武のことを尋ね、或は其術を難じなどしけれども、道之助もとより温厚の人にて、ことに儒学にも心を込め

し人なれば、女に似合ざることを怪しみ、只(11ウ)何
 となく、暇を遣したりしが、また同家中に大木悪善と
 いふ人有り。是へ奉公しけるが、此悪善強力の聞へあ
 り。只、北方の強のみにして、文学の才なし。
 自らも其力に諷じて、常に四斗俵の小くちを隻手
 に掴んで、行燈の火など消し、また或時は搗臼を庭に
 すへ、階上口に匍匐して烟管を銜へ、片手を以て米な
 ど精、樂しみとせしに、かの女、「大爺、少し休勞給
 へ。我御替わり申さん。」と云しに、(12オ)(12ウ・13
 オ 挿絵6)悪善、「田舎者にて、人の為し居るを見て
 「心安き事よ」と思ふならん」と、傍らへ寄り、其さ
 まを慰まんと眺めいたりしが、片手を以、是を動かす
 事、いと軽げに見へければ、悪善、大に驚き、「たとひ
 男子たりとも、我に勝者あらじと思ひしに、女にてか
 く振る舞ふ事、珍しきものなり。いで引くんで力を
 角べん。」と云ふ。女、莞爾笑ふて、「いざ御相手。」
 と、辞するところなく、悪善と引くんだり(13ウ)し
 に、其形貌画に描ける鬼女の如く、髪逆立ち、唇
 耳まで裂けて、眼は天目の如く、其光り百鍊の



鏡(かがみ)の如(ごと)く見へて、いと恐ろしき言わんかたなし。悪善(あくぜん)、「妖怪(ようかい)ござんなれ。引捕へて、手柄にせん」と、力に任せて組み伏せしと思へば、其ま、我五体地に倒れて、身の毛よだちて、いとのすごく、終、妖怪の行き方を知らず。これより心地悪しく覺へて、臥したりしが、後、終に強力の業を止めしとかや。(14才)唐土にても、学士某、無鬼論を著して、鬼の為に苦しめられしとあり。(『晋書』卷四十九「阮瞻伝」)人智浅き者、狐狸の為に欺かれ、その術に謾する者は鬼の為に困せしむ。慎まらずんばあるべからず。鬼といへども、其無心無意をうかごふ事能はず。鳩巢先生、駿墓雑話、加州飛駟山の天狗のことを引用せられしを見るべし。(『駿台雑話』卷二「飛驒山の天狗」)

怪談弁妄録卷四

卷四の一「一商客暴死して閻王を見る」

城州伏水の一商家の男三四郎、弱冠の頃より、花街柳巷に遊びて、家産を忘れ、只明け暮れ、路傍の情に愛でて馴通しが、かの里にいまといふ

娼婦と深契、鴛鴦の衾を共にし、比翼の枕を並べて、暁の鐘の早きを恨み、東雲告ぐる鳥の声を、「辛き別れとしらでさへづる」(『新勅撰和歌集』恋三七九四)と云ひし古人の心も同じと、尽きぬ別れに、袂を分かち帰り、只、春の日の(1才)長を恨みて、日を招き返せし人ありと聞けば、また地を縮る術なからで、春の日を秋の日と為す手立てもがなと、時計の数の早きを喜び、黄昏遅しと待わびける。親のいさめ世のそしりを思わずと、兼好法師の云へるもむべなり。

『徒然草』第三段

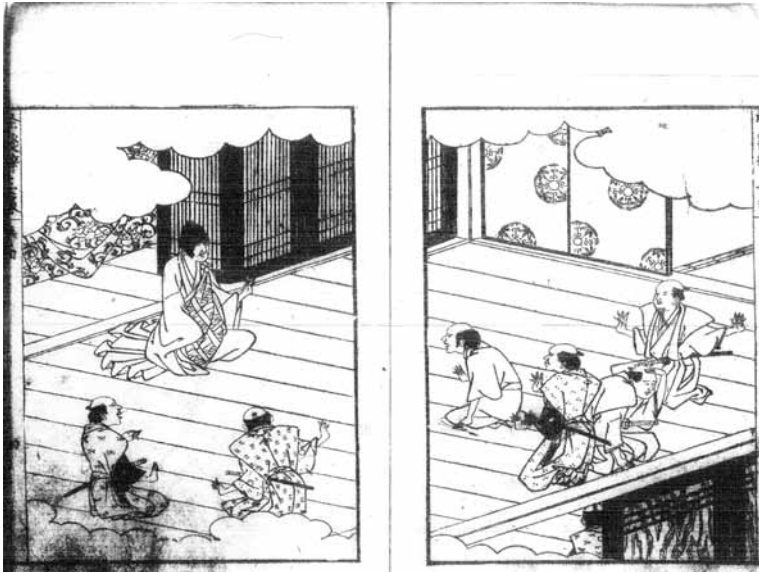
ある時例の如く、いまと比翼の枕を並べて臥しけるに、三四郎ふと心地悪しき様に覺へけるが、其俛絶へたり。いまは大に周章、揚屋の亭主を始め、皆、薬よ水よと騒ぎ、(1才)介抱しけれども、もはや手足も冷へて、医療も叶ひ難き由を云ひければ、父母を始め、いまでも大に嘆き悲しめども、甲斐なし。老少不定と説れし、金仙の教へ思ひ知られて、いと哀れなり。「古墓多是年少人」と云ひし唐うたも、実もと一族寄り集まりて、葬埋の礼をなさんと、寺僧を招して読

経せしに、棺の中より「我をいかにしてケ様になしける。」と云ふ声聞こへしまま、皆々驚き騒ぎて、近よる者もなし。(2才) よふよふにして僧近く寄りて、仏名を称し、「早く三悪道を解脱して、成仏せよ」と袈裟を棺に掛けけるによりて、三四郎内より気づきて、「未だ死に申さず。」と云ふにより、人々初めて落ちて、棺を開けば、三四郎、身うちの汗、泉の如し。「さてさて恐ろしき事どもかな」といふにより、皆、其子細を問ふに、「我、始、地中へ陥ると覺へしが、須臾に、衆鬼我を引たて、閻王の庁前に引すへしに、牛頭鬼身の(2ウ)もの、其外唐冠服の士多く並び居たり。唐冠服の士、奏して曰、「かの者娑婆にて、商家へ生れながら、その産業をも修めず、あまつさへ、大切な金銀を費やし、父母の心を苦しめ、色に淫し、酒に耽りて、日を恨み、長夜の飲にならふ。其罪科輕からず。」と訴ふ。閻王、左史に命じて簿を点検して曰、「三四郎、命数未だ尽きず。色慾過度して、陰陽其正氣を失なひ、四肢筋骨をめぐらさず、偶々に瞑(3才)(3ウ・4才 挿絵7) 眩

するのみ。即、三四郎を叱つて歸らしむ」と見て、蘇生。」と云ふて、仏名を唱へ、涙を流し、恐れ震いければ、親族をはじめ、寺僧も奇異の事に思ひて、飲食などと与へて、平生によふよふ復しけるが、これより花柳街の遊びも止めて、家督をも弟に譲りたき由を父母に願ひて、明け暮れ、かしこの寺、これの道場へ参詣して、念仏一三昧をなし居たりしが、後、京に來り、四条辺りに住めりといふ。安永年中の事なり。

(4ウ)

唐土の晋の趙簡子、死て蘇生せり。天宮にいたり、天樂を聞きしことを記す。(『史記』「趙世家第三」) 郭の太子死す。扁鵲診して、これを治す。人、みな神医とす。死せる人を生かせるを以て也。扁鵲が曰、「我、死せる人を生かすこと能わず。只、未だ死せざるが故に、これを生かせり。」と云へり。(『史記』「扁鵲倉公列伝第四十五」) 趙子も未だ死せざるが故に、蘇生せり。一旦、死せる人の蘇生せるといふ謂れなし。扁鵲、名医なるが故にこれを知る者なり。庸医(5才) は手足冷へ、息出でざれば、



巻四・3ウ～4オ 挿絵7

死せりとして弁(へん)すること能(あた)わず。天宮(てんきやう)にいたり、天
樂(たらく)を聞き、閻王(えんわう)を見る。みな夢(ゆめ)なり。死せざるが故
に夢を見る。未だ(いま)仏法(ぶつぽう)中国(ちゆうごく)に入らざる前に、閻王を
夢見(ゆめみ)すと徠翁(らいきやう)の護園隨筆(けんえんずいひつ)にもいへり。〔護園隨筆〕
卷二 死して蘇生(そせい)せるもの多くは、癩痢(れんり)と同じき疾
なり。人これを知らず、其怪(あや)しきを伝(つた)へて、ついに悟
らず。しかれど、庸人(やうたう)と語(かたろ)べからず。一本堂行余(いつぽんどうぎやうよ)
医言(いげん)にもいへり。〔一本堂行余医言〕卷五「附字
辨」(5ウ)

卷四の二「天狗老婆を誘ふ」
江州大津(かうしやう)大津(つきのまき)駅(えき)に住める、売帛家(うりやく)升屋平蔵(のりやへいざう)と云へる
者の老母(らうぼ)、年六十余(としよ)に及、来世(らいせ)も近ければ、未来の作
善(ぜん)をなさんと、朝夕(あさゆふ)、あの寺この道場へ参詣(さんぎ)怠る事
なかりしが、ある時寺へ参る由云ひて、出行(しゆつ)きしが、日
たけて家に帰らず。かくて其夜深くなれども、訪れも
なければ、家内騷(さわ)、東西南北(あなただこなこ)、知己懇家(しちのけんか)へ人を遣は
し、尋ねれども、其あり所知(し)れざりしに、四五(6オ)
日過て、朝、老母(らうぼ)の声(こゑ)して、「これは大に御苦勞(ごくろう)かた

じけなし。私が家はこれにて候。先御入なされよ。」と云ふに、驚き出て見れば、老母門口に立居たりしが、外に人も見へざりしにより、先々介抱して、内へ入れけれども、正体なく、只熟睡して、人氣なしかくて一兩日過て、よふよふ人氣つきけるによりて人々、「いづ方へ行居給ふや。」と尋ねしに、「此間、寺へ参らんと出行きし途にて、僧一人来り。「まづ此方へ来るべし。そこもとは（6ウ）心遣ひを致さると見へたり。まづまづこの方坊に心置なく滞留して、望もあらば何によらず、遠慮なく申さるべし。」と云て連れ帰り、飲食は申に及ばず。其結構いわんかたなし。これも仏の御陰なりと、内のことも打忘れ、有難さに称名を唱ゆれば、僧の云わるるには「仏名を唱ふことは止めらるべし。」と云ふ。我思へらく、僧の念仏を薦めらるこそ道理なるに、咎めらるるは、いと不審なりけれども、僧の云わるる事なれば、申さ（7オ）ぬが善きにやと思ひて、申まじと思へども、あまりうれしさにまた思はずも、称名を唱へけること、度々なりしかば、かの僧「さてさて物覚への悪き人かな。その

様に念仏が申たくては、此坊に置かれまじ。」と云ふにより、また思はずも、「南無阿弥陀仏。」と云へば、かの僧、「此坊に置かれまじ。送り帰し申さん。」と、これまで送り届けられしが、其後は覚へず。」と云ふ。此時奉公に出し、二男の吉兵衛、病氣にて家へ帰り居たり。心遣を致（7ウ）さるると云ひしは此事なりといふ。

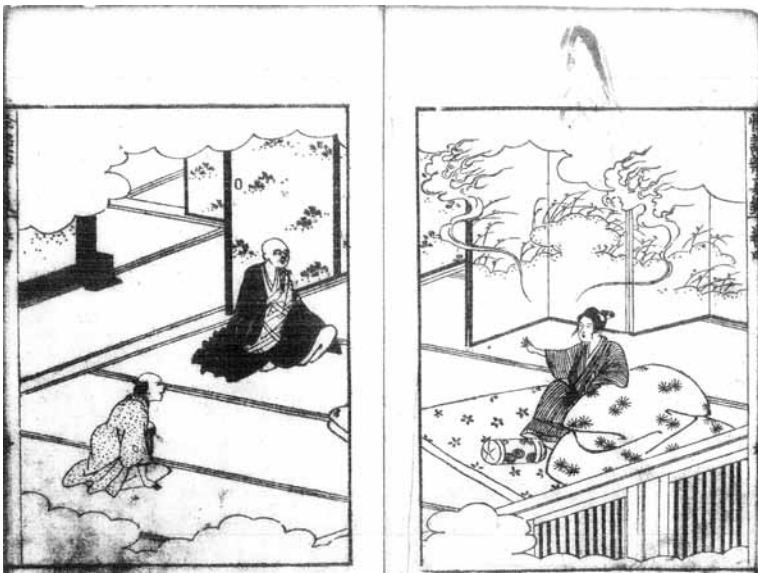
此事、緇徒をして説しめば、其道の尊きを誇尚すべし。これ只、仏名のみならず。其一心より正徹することみなしかり。鈍ら刀を正宗の名作なりと云ひ伝へて、瘡疾をおとし、狐狸の憑きたるを除く。みな一心のなす所なり。一心より通徹する所、みなしからざるところなし。此事学才ある人ならでは共に論じ難し。迷盲の人と語べからず。（8オ）

卷四の三「美丈夫二婦に恋せらる」

京師、東洞院松屋某の長男、鶴之助といへる者、生質美しくして、色甚白く、其形貌優れて、野鶴の鶏群を出るが如く、都人士女余国に優れて

清けれども、鶴之助に及ぶ者なし。室女閨婦これが為に、心を悩ませし中に、松屋の主家に勤めし小妮子、さよといへる者、鶴之助を見染しより、只、朝夕その面影の身に添ひて、忘れ難く云ひ寄らんにも、長柄の（8ウ）橋の中絶て、文送るべき便りもなければ、独り思ひの胸を焦がし居たりしが、主家の事なれば、朔望の勤に、鶴之助親子、月毎に来りける故、何とぞ近づき、心の丈を明かさんと思ひけれども、主家大爺、儒学に志し、男女の別甚だ正しく、近寄る折もなかりければ、只、其姿を襖の隙より見るのみにして、いとど思ひの増さりて、病まふ床に臥しにけるが、次第に病重りて、終に空しくなりにける。それより鶴之助例（9オ）（9ウ・10オ 挿絵8）ならず、次第に憔悴て、物の怪の如く、いと怪しき事を云ひ、又は病床をあちらへ直させ、又こちらへ直しなどして、いと苦しげなる有様なれば、父母の歎いわんかたなし。医師はもちろん、或は道士の符を乞ひ、僧侶の祈祷を頼みて、其治を求むれども、少しも験なし。

ある日、五山行脚僧多く托鉢して、門を過けるを、



病者、「あの僧を招きくれよ。」と云ふにより、小廝をして迎へしむるに、其中より、僧、忝に進み出で、「我(10ウ) 心当たりの事あり。尋ねんと思ひし。」と云ふて、即、内へ入れば、兩親伴ひて、病人の前に至るに、鶴之助起上がり、両手を地につけ、「私事は、御本家に勤め居申候。さよと申者なるが、ふと、此方様を見染め参らせ、言い寄る事も浮舟の便りなくて、病に沈み、終に空しくなり参らせ候が、罪業深く、六道に流転て浮かむ事能わず。何卒、和尚様の業力を以、成仏得脱を得せしめ給へ。」と、云ふ声、そのとりなり、実(11オ) にさよに少しも変わる事なし。皆、奇怪の事に覺へて、僧を頼み、仏事供養を為し、袈裟を病者に掛させ、懇ろに読経しければ、「有難や。今こそ仏果を得候。」と云ふ声せしに、また一人女の声して、「私も共に助け給へ。」と云ふに、僧をはじめ、家内の者驚、「こわいかに。」と云ふに、僧、病者に云ふて曰、「助けよとは、何方の女性なるぞ。」と、問へば、「私は御近隣に住める、万屋活兵衛と申者の娘にて候が、鶴之助様を見染しより、打隊(11ウ)

し居申候が、おさよ殿と争ひ、いと苦しく候。」と云ふに、僧の曰、「未だ死せざる人ならば、愚僧が、善きに計らふべし。」と云ふて、父母に向ひ、「かほど迄に恋する者なれば、呼び迎へて、夫婦に為し給へ。」と薦めしに、万屋は、家貧しくて、その配偶にあらざれども、僧の薦めにより、結納を入れ、呼び迎へ、醮礼を為しけるとなり。死靈生靈憑きて、忝人の男子を争ひし故、病床の所を変へし事思ひしられたり。(12オ) 此等の怪異、もと浮屠氏の其法を誇尚せんとして、書記せるものなり。妄語戒の律に背く事を免れ難し。(12ウ)

怪談弁妄録卷五

卷五の一「姦夫義激して淫婦を殺す」

室町麾下の士、山岡九之助といへる者、松尾喜治郎が妻と私に通じ居たりしが、ある時、喜治郎が出るとを嘲ひ、門に入て、床に登に、喜治郎帰れば、九之助、屏風の後ろへ伏し隠れて、これを避く。婦問て曰、「何の故にまた回り給ふや。」喜治郎

が曰、「天いたつて寒し。もし汝が熟睡して、足衾の外に露せるを思ふて、冷に傷まんを恐れ、来て被（一オ）を添んと帰れり。」とて、即ち加覆てまた去。婦大いに笑ふて、九之助に云ふて曰、「かれ至つて痴保なり。我が公と比翼の枕に樂む事を知らず、我を愛憐よ。」とて、絶倒。九之助心も思ふやうは、「かれ婦を愛するのかくの如くなるに、婦また予と奸淫するのみならず、夫を罵事、誠に憎むべし。」とて、佩刀を取て、婦を殺傷て去る。

折節、売菜翁、蔬を売に婦の家へ来る。門に入て叫に人なし。即、戸口を出で去。隣の婦人、是を見（一ウ）て、其夫に告、事の由を官に告ぐ。官、即時に売菜翁を累執て糾明すれども、分明なる事能はず。誣伏獄を為して、棄市とするの日、九之助出呼曰、「かの婦を生害せし者は我なり。何や他人を累して命を絶んや。」と、終に監決者に白す。監決者これを問へば、九之助、事の由を委細に訴ふて曰、「此婦人、実に臣と通す。一時殺氣発するにより、かの婦人を殺せし者は我也。何

ぞ他人を累す事を忍びんや。願は早く死（二オ）を給へ。」と云ふ。上の曰、「吾人の不義を殺し、一人の無事を生す。嘉すべし。」とて、即、許さると云ふ。其後、かの婦人の幽魂六道に流転して、浮かむこと能はず。雨の夜、また暗黒にはその辺りを陰火飛びいづる事、年久しく止まずといふ。

この話説、群談采餘に記する所と符説す。（明・倪綰撰『群談採余』、未見）古戦場、陰火燃ること博物志に記せり。（晋・張華撰『博物志』、未見）これ人馬の油、地に染みて致す所なり。何ぞ、よく一奸婦の油、戦場、人馬の多が如きな（二ウ）らんや。しかれど、世の淫婦の激勸に備ふべし。

卷五の二「巫術拙ふして小厮の為に其妄を現す」京師、里村某の家、ある時一器物を失ふ。遍く索め探せども、得る事能はず。隣家に神巫あり。占をよくし、また禱祭して、疾病、その外諸事をよく転換し、殊に、失物など妙に其有所を知ると、ややこれを薦む。よつて、招請して、是

を求む。巫至りて、醮壇を設け、紙幣を植て、主人に云。「遍く家人をして、悉く(3才)壇の前を過しめよ。もし盗し者あれば、幣、自づから揺動(左訓「うごく」せん。と云ふて、秘文を唱へて、虚構す。主人、其言葉に従ひ、家内の人を残らず、その前を通らしむ。他、異なることなし。一小僕、過ぐるにおよんで、紙幣忽ち震い動く。衆人大に驚き恐れて、「神妙なり。」と云ふ。小僕、忽ち腕を捲りて、大喝一声して、巫の胸を撞て、地に倒擲(左訓「たをしなぐ」す。巫の足の大拇より長き糸を以て、幣の柄に結びつけた。家人また(3才)驚き、大に呵罵て、これを逐ふ。巫、大に錯愕(左訓「あわてて」して、逃げ帰れり。

世間の占児、妖巫、奸僧の所為、みなかくの如し。庸人、智識なきが故に甘心して、是が為に、其欺を受くる者多し。只、妖巫、奸僧のみにあらず。狐狸に災ひせらるる者、また智識なき故なり。

卷五の三「二奸利を射て良吏の為に遂放たる」
 城州伏見に市郎兵衛といふ者あり。仏道に(4才)帰依して、朝夕の勤行、怠ることなく、暇あれば、寺に詣で、説法を聞く。尤、殺生戒を保ちて、諸虫を踏まざる程の者なりしかば、その辺りの人、名を呼ばずして、仏と異名しけるが、仏、ある宵の夢に忽然として、阿弥陀現われ出、告げて曰、「我、汝が隣家の門口の土中に、隠隠るる事、年久。汝が信心の厚きに感じ、特に来りて告為に、土を撥、吾を出せよ。」と云ふと覺へて、夢醒めたり。翌朝に及んで往て、隣主に其(4才)事を告るに、隣主、信なりとせず、「夢は五臓の爲すところ。何ぞ証拠とせん。」と云ふて、肯て掘事を許さず。しかしより、夢見る事連夜にして、七日にいたる。強て、隣主に請ふて、闔下の土を掘事五尺、一物なし。隣主、叱て曰、「夢妄なり。」と云ふまま、強て掘ること尺余、一軀の銅像を得たり。隣近、嘩傳して、感得の妙といふ。市郎兵衛、「将奉して帰らん。」と云ふ。隣主これを与へ

ず、「夢は汝の感する所。宅は我が住する所なれ
 (5才) (5ウ・6才 挿絵9) ば、あへて渡す事能は
 じ。」と相持て、互に不下、遂に官に訴ふ。

その頃、邑吏水野侯、良吏なり。其振舞い疑はし
 とて、二人を執らへて、鞠訊に就しめんといふに、二
 人、大に恐れて、共に訴日、「前年、我ら兩人謀
 て、陰に土中に埋置て、頃日夢に託して、発掘
 し、利を射んとせし」詎をつぶさに言上して、万死を
 赦されんことを願ふ。侯、大に兩人の者を叱て、死
 を許さるといふ。

大抵、夢寐の兆といふもの、みなこの類なり。
 (6ウ) (奸) 者これを為して、愚者甘心し欺かるる
 ものなり。夢想と称するもの世に多し。嗚呼
 妄哉。奸者は誅すべし。愚者は怜べし。

卷五の四「痴僧財に死して度脱ことを獲ず」

東都東叡山、広小路の辺に、庵室を構へて、住
 せし僧ありしが、病の床に臥して、叶ひ難く見へしま
 ま、その姪、看病してありけるが、程なく身罷りける

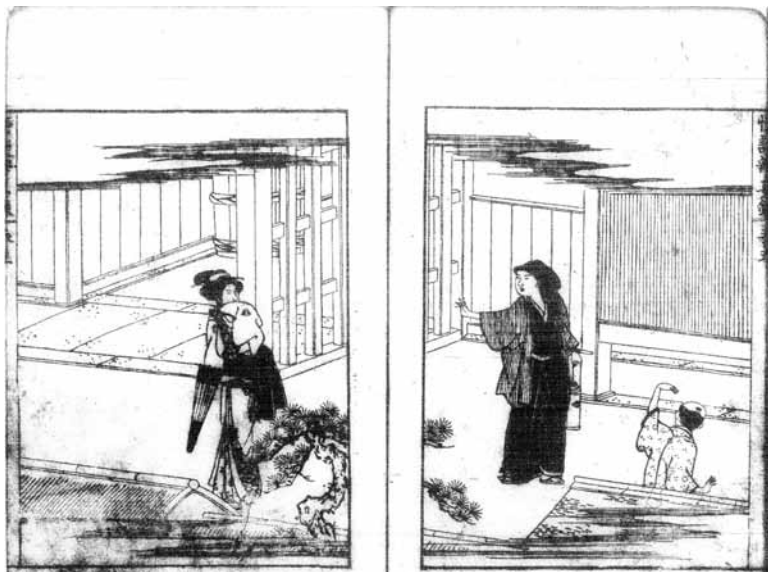


故、葬送のこと終はりて、其庵室に跡を継ぎ、念仏する者もな（7オ）ければ、調度の類は売却て、一族方へ別ちたりしに、かの庵室の跡へ移るもの、皆、十日も住事能はず。「いかに」と尋ぬるに、毎夜深更に及べば、其家に何処ともなく、一人の坊主出来たりて、竈の辺りに佇み居る体にて、暁方には何方となく帰れり。甚怪しみ恐れて、人住まず、空き家となりてありしに、ある処士、山内権九郎といへる壮士、かの家に移りしが、また彼妖怪出来たりて、窯の前（7ウ）に居る体なりしを、かの壮士、佩刀を携へ近よれば、何者も見ず、二、三間隔てみれば、坊主立居る体なり。壮士気づき、夜明けて、窯の下を掘見るに、一の甕缶あり。発き見るに、金子五十片斗入ありしにより、その家主など立ち会ひて、寺へ送りて、仏事供養など致しけるが、それよりまたかの怪なしとなり。

此等の話説、古しへより云ひ伝へて、児女子の話説と小異大同なり。誰見しといふ事も（8オ）なき、虚妄のことなり。

巻五の五「色を好みて古狸に災ひせらる」

京師、下立売油小路に名高き俳諧師あり。名を馬南と呼ぶ。平生好色に耽りて、暇あれば、青樓に遊んで、楽としけるが、ある時、東辺より帰りしに、三條にて、年頃二十一、二の美しき女に逢しが、もとより女好のことなれば、見惚れて、跼蹐し居たるに、かの女も同様なりける様なれば、言葉を掛けみるに、いと心安（8ウ）くなびきける故、伴ひ帰りて、枕をかわしけるが、かの女云ふよう、「私は、室町三条辺に居る女なり。」と云ふにより、いよいよ氣遣ひなく、重ひ契りを結びしが、ある時、かの女いつもの如く、馬南方へ来りて、枕を並べ臥し居たるに、何時ともなく逃帰れる体なりければ、下男を呼びて、大に叱り、「女もし帰らば、何ぞ我に告げざるや。」と云ふ。下男も知らざる事なれば、驚き、門など吟味するに、宵に閉せし如くなれば（9オ）（9ウ・10オ 挿絵10）、如何と家内中を探り求むれども、終に見えず、馬南その節より力なく覺へしが、次第に疾重りて、医師など頼み、療治を求むれども、叶ひ難く、次第に元氣衰へ



卷五・9ウ～10オ 挿絵10

けるが、ある医者^(いしや)脈^{みやく}して云^いふよう、「これは鬼物^(きぶつ)に血^(ち)を吸^すはれしものなれば、葉の及^{およ}ところにあらず。」と云^いひしに、程^{ほど}なく瘦^やせ衰^{おとろ}へて、画^(え)に描^かける餓鬼^(がき)の如^{ごと}くなりて、死^ししたりとなり。

狐狸^(こり)の庸人^(ようじん)に災^(わざはひ)する事、尤^{はなは}甚^{はな}だし。しか(10ウ)れば、美婦^(みふ)、美丈夫^(みじやうぶ)となりて男女^(なんにん)を誑^{たが}かすといへども、狐^(きつね)は人の命^(めい)を絶^たたず。狸^(たぬき)好^{この}んで、血^(ち)を吸^すひ、人を殺^{ころ}す。好色^(こうしき)の人戒^{いまし}むべし。

怪談弁妄録卷之五大尾(11オ)

寛政十二庚申八月

京都書林

秋田屋藤兵衛

吉野屋仁兵衛

西村屋吉兵衛

(11ウ)